

一二月九日

増井邸オープンハウス。学生も含めて多くの人が川口の現場に集まった。院生も支援センター商品の販売に精を出し、いつもよりは明るい。しかし、この場所は工務店経営には抜群のロケーションであることを了解した。人の集まりやすい場所なのだ。枕木で作った階段が沈没寸前だった建築本体を救った。まったく建築は微妙なものだ。少しの事でガラリと表情が変わる。土屋檜垣は現場泊まりで少しは良い体験になったであろう。

檜垣の生かし方に少し光明が指したように思う。実際に物を作らせる機会を増やしていけば良い。独特な存在になるやも知れぬ。

見学会で配布されたパンフレットに私のキャリアが整理されて出ているのだが、極めて呆気ないもので、コレまでこれ位の事だったのかと、妙に身につまされた。五〇を過ぎて一切手を抜かずに行っているつもりだが、まだまだ薄味なのを痛感する。

増井邸自体は最後の最後で、自分で課している水準にはすべり込んだように思う。

まずイイ ハウジング カンパニーの活動方針を決めてすぐにも走り出さねばならない。定期的に人材を出して、一種の共同経

営スタイルが望ましいと思うが。石山研に営業能力がありそうなのが少いの辛いところだ。一週間に一度は増井君と定例会を開く必要がある。最初にやるべきは、この会社だけにしか出来ぬ事を決めて、それを宣伝することだろう。来週に決めてしまおう。

一二月十日 日曜日

午後相模湖のT先生訪問。お元気そうでホッとす。自分でも少しづつ体をいたわってやる事に心を使わなくてはならないのが我ながらおかしい。明日からの一週間は十勝の仕事に集中する。デザインする力がどれ程蓄積されているか自分で自分を点検する良い機会だろう。〇ゼロハウスプロジェクトも来年早々には具体案をスタッフに提示できるように準備しなくては。何から何まで自分で考えなければならぬ間は大丈夫なのだ。スタッフの非力未熟に感謝しなくてはならない。

地道な努力の類は変革期には通用しない。勿論、大げさな身振りにはそれにも増して役に立たない。冷徹な歴史認識だけがカジを取らせるのだろう。徹底して考え抜かねば生きていけない。無駄な事は省かなくてはならない。例えば金もうけとか、拍手喝采とかの無駄は邪魔だ。